２０２１年１１月１４日　説教『使命に生きる』　　高橋克樹牧師
聖書　出エジプト記６章２～１３節、マルコ福音書１３章５～１３節

６章２～１３節までは、神がモーセに対して召命の根拠を語る記事（祭司資料）です。３章にもモーセの召命記事があり、そこではモーセが召命に至るまでの経緯が記されていますが、６章は召命の根拠が何であるかを神がモーセに語り聞かせる内容となっています。ここでは神は『私はヤハウェ（主）である』と自己紹介をするのですが、『アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神（エル・シャダイ）として現れたが、主（ヤハウェ）というわたしの名を知らせなかった』（３節）と語り、ヤハウェという名を初めてモーセに知らせるという内容になっています。このヤハウェという名前が翻訳では主となっているのです。モーセをエジプトからの解放の導き手として用いるにあたって、ヤハウェがイスラエルに告知するように命じた使信は「わたしはヤハウェである」という御自分の名の宣言で始まり（２節）、その名の宣言で終わっています（８節）。その間にはさまれた言葉の中に、神のイスラエルに対する３つの御旨が示されています。

第一は、『腕を伸ばし、大いなる審判によってあなたたちを贖う』（６節）と、奴隷の軛エジプトからの解放の約束が与えられています。第二は、『わたしはあなたたちをわたしの民とし、わたしはあなたたちの神となる』（７節）と語って、イスラエルが神の民として契約の中に取り入れられることを約束します。第三は、『わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると手を上げて誓った土地にあなたたちを導き入れ、その地をあなたたちの所有として与える』（８節）と、先祖たちに約束した土地を賜物として与えることを約束します。このように、ヤハウェという名は、神の約束を神自らが実現させる保証としてモーセに語られたのです。

３章の召命記事の前の２章１１節以下でモーセに関する興味深いエピソードが紹介されています。それは彼が成人した頃に、同胞のヘブライ人が重労働に服しているのを見たのですが、その際に一人のエジプト人が同胞のヘブライ人を鞭で打っているのを見て、助けるためにそのエジプト人を打ち殺して死体を砂に埋めたという記事です。その翌日、二人のヘブライ人同士の喧嘩をモーセはまたもや善意から仲裁に入るのですが、『お前はあのエジプト人を殺したように、このわたしを殺すつもりか』（２章１４節）と言われてしまうのです。そこで、モーセは一夜のうちに殺人のことが皆に知れわたったことに恐れの感情を抱きます。周囲に誰もいないことを確かめて内密に行った行為が、なぜ一夜のうちに人々に知れわたってしまったのか。

これを心理学的に説明している学者がいます。心理学者のレヴィ・メイヤー

がモーセについて書いた著作の中で「私たちが手助けする人々が、ときに私たちに突然刃向うことは驚くに当たらない。なぜなら、私は彼らが最も傷つきやすく、ひどく困った決まりの悪い思いをしているときに、彼らを助けたからだ」と説明しています。メイヤー氏によると、彼のところにカウンセリングを受けるために来ている人たちは人生の困難を抱え、薬物依存やその他の人生における敗北や失敗を経験して、どうしようもなくなってカウンセリングを受けに来ています。彼らは気まずい自分の秘密をどうしても語らなければならず、いつもばつの悪い思いをしているのです。人を手助けしようとしているのだから、助けられている人たちはカウンセラーである自分に感謝することを期待しがちですが、実は相談者は私を見る度にばつの悪い思いをしたことを思いだし、それが好きになれない自分を意識させることになります。また、相談者は自分の芳しくない秘密を知っているために、自分たちはカウンセラーによく思われていないと思いがちだとも説明しています。さらには、自分が誰かの助けを必要としている事実は、自分が無能な存在である事実に向きあわせてしまうので、決して助けられた人が感謝するとは限らないと説明しています。

モーセはイスラエルの歴史上最も偉大な指導者の一人ですが、このような失墜を経験して、ファラオの子でありながらも、ファラオの追及の手を逃れて４０年間も放浪の旅をしなければならなかったのです。逆に言えば、人を助けようとする純粋さと、単純な正義感から４０年間も放浪の旅をしたモーセだからこそ、神は出エジプトという壮大な救済の働きをモーセに行わせることにしたのです。モーセは自分に与えられた使命に生きることを自分の失敗から学んだのです。

神はモーセを召すにあたって非常に大切な基本的指針を与えています。それは十戒に代表される「戒め」なのですが、そこにはエジプトで奴隷状態にあったイスラエルの民の人間的自由と尊厳を守るための配慮が示されています。せっかくエジプトから解放して自由にさせても、ヤハウェという別の主人がエジプトの支配に取って代わっては、解放した意味がないからです。本日のテキストでも『腕を伸ばし、大いなる審判によってあなたたちを贖う』（６節）と、エジプトからの解放の約束が語られています。それが十戒の第一戒の『わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である』（出エジプト記２０章２節、申命記５章６節）につながっていくのです。人間は奴隷状態から解放されて自律性を確保して初めて、神との関係においても隣人関係においても自発的に戒めを守ることができるようになるのです。ロボットのように神の言いなりになっては、自分の主体性を放棄したならば、ヤハウェが解放した意味がないのです。

戒めは服従を強制されるところでは機能しません。戒めは人間の自由意志を

縛るためのものではなく、自由意志を持った人間の尊厳を守るために定められた共同体の約束事であり、その戒めの意味を主体的に認めて従うことで初めて効力が生じるものなのです。本日のテキストにも登場した神との契約関係も、自発的な服従によってその契約が維持され、人間の自由と尊厳が確保できるのです。もしも神が己を絶対化し手人間を奴隷状態にするのなら、その神は絶対君主になってしまいます。逆に、人間が自分の主体性を最終的な判断基準にして生きようとするならば、人間の自由と尊厳を確保するための戒めは破られてしまいます。だから、第二戒である「あなたはいかなる像も造ってはならない」（出エジプト２０章４節、申命５章８節）という偶像礼拝禁止の戒めが登場するのです。この戒めを命令ということではなく、ヤハウェという神と人間の自由をめぐる課題として捉えるならば、さまざまな神の中からヤハウェだけを選択する自由を与えているとも解釈できます。律法で最も有名な戒めは「あなたの隣人を愛しなさい」ですが、それには「自分自身を愛するように」（レビ記１９章１８節）との付則がついています。人間は誰でも自分のことは愛するので、この戒めがより実践可能であるように、分かりやすい神の言葉が加えられているのです。

また、この偶像礼拝の禁止は、人間が神を造りだすことによって、人間が己の力や欲望を神とするような倒錯（とうさく）に陥り、自律性を失わないようにするための神の配慮と考えることもできます。このように見て来ると、６章におけるモーセに対する約束の背後には、神の人間に対する遠大な配慮と、人間に対する信頼の姿勢があることに気づかされます。人間にとって自由と尊厳は不可欠なものですが、実際には自由が重荷になってしまうことも多い。偶像礼拝はまさにその人間の弱さを現わしています。キリスト教においても、人間が造りだした政治的、宗教的な権力の誘惑に陥って、束縛されて生きる安易な道を選ぶことが後を絶ちません。人間は自分で悩み苦しんで生き方を模索しながら生きていくよりも、自分で思考することを放棄した方が実は楽な生き方ができるのです。ドストエフスキーのカラマーゾフの兄弟に登場する大審問官の話が代表的です。安易に神に依存する意識が偶像礼拝を生み出すのです。モーセの召命の記事に隠された神の深い配慮の思いを受け止めて生きていくことを決断した時、モーセがイスラエルの民を奴隷の地エジプトから解放する神の働きに己を献身させていく使命を見い出して、苦難の道を歩みだしたように、そこには客観的には荒野の４０年間という苦難が待ち受けていたのですが、モーセはその苦難を生き抜くことができたのです。申命記３４章（３３８頁）を読んでみましょう。「モーセはモアブの平野からネボ山、すなわちエリコの向かいにあるピスガの山頂に登った。主はモーセに、すべての土地が見渡せるようにされた。ギレアドからダンまで、ナフタリの全土、エフライムとマナセの領土、

西の海に至るユダの全土、ネゲブおよびなつめやしの茂る町エリコの谷からツォアルまでである。主はモーセに言われた。「これがあなたの子孫に与えるとわたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓った土地である。わたしはあなたがそれを自分の目で見るようにした。あなたはしかし、そこに渡って行くことはできない」。主の僕モーセは、主の命令によってモアブの地で死んだ。」とあります。つまり、彼は最後、カナンの地を踏むことなく、その直前に死んでしまうのです。しかし、彼の生き方を貫いていた使命感が後のイスラエルの民に受け継がれて、神の御旨から逸れてしまいそうになると、幾人もの預言者が立てられ、ヤハウェに対して自由意志で従っていく道筋が示され続けたのです。神の目から見ると、一人の信仰者を生かす使命は、その人個人の人生で完結するのではなく、一人一人が神から与えられた使命を果たす中で、その使命が次の世代に受け継がれていき、最終的に神の御旨が実現していくのです。申命記がモーセの死で終わり、モーセの後継者ヨシュアによって率いられた民がヨルダン川わたって約束の地カナンに入って行くのです。しかし、それはこの世的な意味で、神が人間を時計仕掛けの歯車のように用いているのではありません。モーセが最後に見渡した約束の地は、神がモーセを用いてイスラエルの民を導いた希望そのものなのです。その希望を次に世代に委ねるモーセに神の恵みの御業が現わされているのです。私たち信仰者も目の前に断念がたとえ横たわっていたとしても、モーセを最後まで生かした神の使命に気づかされて前のめりになって生きていきたいものです。